

『二十四の瞳』と女性たち

—教育の重要性—

Female Characters of “Twenty-Four Eyes”:
The Importance of Girls’ Education

若 林 亜 実

WAKABAYASHI Ami

一 はじめに

壺井栄の小説『二十四の瞳』は、「ニューエイジ」（一九五二年二月～一九五三年一月）で発表され、『二十四の瞳』（光文社、一九五二年一月）に所収された。本テキストは、軍国主義が色濃くなつていくなかで、時代の波に翻弄される子どもたちと大石久子の交流が中心となつて描かれている。『二十四の瞳』の先行研究は、主に反戦文学としての観点から考察したものが多く、大石が生徒へ向ける愛情は母親としての愛情と同じもので、この小説を「母性の文学」とするものも散見される。そのなかでも滝川弘人は、

「二十四の瞳」に母性が強調されることで、教師の専門性は確立する間を与えられず、家庭の役割の一端を学校が担うしかない戦後期を脱することが、今もできず、教師を母と擬する見方は、今も又、教師と教え子との関係に同化されたままなのでは

ないのだろうか。²⁾

と論じ、『二十四の瞳』における大石と生徒との関係を母子関係と重ね合わせている。また、渡部芳紀は『二十四の瞳』を「母性の作家」「母性の文学」と評する例を挙げた上で、「二十四の瞳」は、戦争と貧しさを糾弾しながらその糾弾の間隙を埋めるように優しい母のような愛情を生徒たちに注ぐことにより作品に潤いと暖かさをもたらししている³⁾と述べている。

『二十四の瞳』の先行研究において大石久子や壺井栄の反戦の意が強調され論じられるのは、壺井栄自身が「くりかえし私は、戦争は人類に不幸をしかもたらさないということを、強調せずにはいられなかったのです⁴⁾」と主張していることと、おそらく無関係ではあるまい。また、従来『二十四の瞳』は母性愛の強い作品だと一括りにされることが多かったのは、大石が取っている戦争否定の姿勢も理由の一つであると考ええる。若菜みどり⁵⁾は、

「平和」は「戦争」と対比され、もっぱら女らしいものとして言説化されてきた。「平和」とは、なんらかの価値を創造するものとしてではなく、戦争の否定、あるいは戦争の不在として消極的な意味をもってきたのである。それは、受動的で非活動的なものであり、それ故女性的な資質と一致しているものと解釈されてきた。⁽⁵⁾

と述べている。

以上から分かるように、『二十四の瞳』を研究するうえで、反戦という大きなテーマの他に、女性性についても押さえておくことが重要だろう。しかし従来の研究において、ヒロインの大石久子に着目したものは多いが、それ以外の女性登場人物に着目したものは少ない。

本稿では、従来「母性的」と一括りにされがちだった大石久子の教師像や、戦争に直接的に関わっていない女生徒の進路について考察を行っていく。

二 教師としての大石久子

本節では、大石久子の教師としての側面に注目し、生徒への接し方が母親的な情を伴うものであるかについて考察する。先に触れたように、『二十四の瞳』の先行研究では大石の生徒に向ける愛情を母親と同じようなものであるとし、作品全体が「母性」の作品であるとしているものが多い。山田昭夫は、

その作品群ににじみ出している最も特徴的なものは母性愛的暖

か味である。そんな意味で壺井栄の代表作に『二十四の瞳』をあげることは、さしたる異論はなさそうだ。(略)

教師としての大石先生、母としての大石久子は、信愛と思慕の対象としての女性の一典型であり、周囲の人々とともに喜び、ともに悲しむ母心の善意の具現者である。⁽⁶⁾

と彼女を「母心の善意の具現者」だと位置づけている。また、大石の母性的な性質に異を唱える先行研究として小林裕子は、

彼女の愛と善意を、母性的と評する意見が多いが、教師時代の大石先生は「母性的」とはやや違ったイメージだ。世間知らずの娘で、母にはわがままを言って甘える。(略) 子どもを絶対的な保護者の立場から慈しむというより、いっしょに歌を歌って楽しむある意味で対等の存在である。だから子どもがなつくのだ。⁽⁷⁾

と指摘している。師範科を経て教師になるという当時稀な進路を取っていた大石が確たる教育の理念を持たない「母性」の具現者であったのかは考察の余地がある。

まず、大石久子の受けてきた教育を確認する。大石は女学校の師範科出身の正教員であり、女学校出身の教員が多かったなかで珍しい存在であった。

こまつたな。女学校の師範科を出た正教員のばりばりは、芋女出え出えの半人前の先生とは、だいぶようすがちがうぞ。から

だこそ小さいが、頭もよいらしい。(略) 困ったな。なんで今年にかぎって、こんな上等を岬へよこしたんだろう。(一四頁)

と大石の同僚である〈男先生〉は語り、気を重くしている。高等女学校を卒業した後に師範学校や専門学校に進学する女子は戦前期を通じてパーセントにも満たないものであった。⁽⁸⁾ 師範科出身が珍しいとされているのは、以下の件からも読み取ることができる。

正規の師範出ではなく、女学校出の準教員(今では助教というのだろうか)のことを、口のわるい大人たちが、半人前などというのをまねて、じぶんたちも、もう大人になったようなつもりでいつているのだが、たいして悪気はなかった。(八頁)

子どもたちが新しく赴任する〈女先生〉である大石を「また半人前か」と呼んでいたことから、村では〈女先生〉は女学校出身という先入観が共有されていたことが分かる。前任である小林先生も師範科出身の大石を「わたしより、ずっとずっとえらい先生よ。わたしのようには半人前ではないのよ」(一一頁)と評価している。これらの表現から、正教員と準教員の差別化が明確に存在し、広く浸透していたと考えられる。

「昭和三年四月四日、農山漁村の名が全部あてはまるような、瀬戸内海べりの一寒村へ、若い女の先生が赴任してきた」(七頁)という記述から、大石が師範科で教育を受けていたのは昭和一年頃であると推測される。大正後期の女子師範学校、師範科では教師になるためにどのような教育を行ってきたのだろうか。

大正期に出版された高等女学校用修身教科書の一つでは、「本書の大骨子たる「女子最高の任務は母たることに在る。」という一結語に達する」⁽⁹⁾と記述されている。また「女子最高の任務は理想の母となることである」⁽¹⁰⁾との記述もあり、良妻賢母教育が主軸となり女子教育が行われていたことが推察される。一方、女子師範学校について新福裕子は、大正六年の臨時教育会議について触れ、小学教員は専門的業務であり、各教科科目を教授する能力の他にも、堅実な教育的精神を持った教育者の人物でなければならないと述べている。また、教育実習をすることで能力を高め、児童の人格を尊重し、個別に生活を考慮して指導することが推奨されているが、女性性を生かした指導や「母性」については触れられていない。⁽¹¹⁾ 良妻賢母の教育に馴染んでいれば、大石は師範科という進路を取らなかったであろう。

師範科出身の大石は、教育実習などを経て生徒の人格を尊重し、一人一人の生活に配慮して指導するよう教育を受けてきた。彼女が実際に、子どもたちの個性と個別の生活環境を重視したきめ細やかな教育を行っていることは以下の件から確認できる。まず、松江への対応である。

母親がなくなつてから、松江は一度もこの教室に姿をあらわさなかった。(略) あまりに事情が明白なので、それでも松江をよこせとはいえず、だまって松江の顔をみた。(略)

「マッちゃん、これ、百合の花の弁当箱よ。あんたが学校にこられるようになったら、つかいなさいね。」(略)
まもなく赤ん坊がなくなつたと聞き、松江のためにほつとし

たのだが、松江はなかなか姿を見せなかった。マスノやコトエたちにようすをきいてもらちがあかず、先生はとうとう手紙をかけた。(七二頁)

歓迎会での「先生、見そこないました。先生がマツちゃんだけにそんなひいきをしたの、知らなんだ、しらなんだ」(一三八頁)というマスノの台詞からもそれが松江だけの特別な対応であったことが分かる。しかし、その後も松江が学校に登校することはなく、まもなく親戚の家に引き取られてしまった。大石は松江が必死に抵抗した話を聞き、涙を流した。次は、コトエへの対応についてである。

まるで女に生まれたことをじぶんの責任でもあるように考えているコトエ。それがコトエを、何ごとにもえんりよぶかくさせているのだ。(略)

「でもねコトエさん——」

それはまちがっているのだというとしてやめた。感心ね、というおうとしてそれもやめた。気のどくねというのも口を出なかった。

「残念ですね。」(略)

正直いかならず貧しい漁師の一家にとつては、それが円満具足のかぎりなのだろうかと、ひとりもどかしがる大石先生だった。さりとてコトエを高等科に進学させることで、貧しい漁師一家の考えが一新させるものではないと思うと、空を眺めてためいきをするよりなかった。(九〇―九二頁)

大石はコトエに対して、無理に進学を勧めることはせず、「残念ですな」という言葉に留めた。これらは彼女が生徒個別の生活環境を考慮し、指導していることがよく分かる場面である。

大石が生徒個別だけでなく、全体に向けても工夫をして教育を行っていたことは以下の件から確認できる。

三時間目の板木が鳴るとともに行進曲にかわり、みんなの足どりをひとりでに浮き立たせて、しぜんに教室へみちびいていた。どんなにそれがたのしかったことが、みんな、心のどこかにそれを知っていた。口ではいえない、それはうれしさであった。

(三五頁)

大石の代わりに〈男先生〉が唱歌の授業を受け持った際に生徒は、自分たちが楽しめるように工夫された大石の授業を懐かしみ、〈男先生〉の授業を物足りなく感じていた。

以上から、大石久子が「母性」を意識していたとは考えにくく、むしろ彼女は教育者として生徒を指導することを意識していたと考えられる。きめ細やかな指導を行っていたとしても、これを女性ならではの教育や、「母性」などという言葉によって一括りにするべきではないだろう。生徒に対する大石久子の対応は母親としての愛情からくるものではなく、教師として生徒に寄り添ったものであると考える。

三 女生徒の貧困と進路

前述したように、『二十四の瞳』は反戦文学として論じられるこ

とが多い。戦争が生徒たちに影響を与えているのは、男子生徒や大石の息子が軍人に憧れる様子、男子生徒のうち三名が戦死し、一名が戦争によって盲目になるなどの場面から読み取ることができる。男子生徒たちの悲惨な結果は、未来ある若者たちが戦争によって奪われてしまったことに対する戦争批判であり、反戦を訴える重要な要素となっている。しかし、女生徒に関しては、戦死するなど直接的に戦争の影響を受ける描写が多いわけではなく、これまで彼女たちの進路や人生について深く掘り下げられてこなかった。女生徒は、男子生徒ほど直接的に戦争の影響を受けていないにもかかわらず、その人生は順風満帆なものではない。むしろ、小学校時点では進路に関して男子生徒よりも恵まれていない者が多い。田丸太郎は生徒たちの人生の過酷さを指摘したうえで、

満足な生活を営み得た人は、小学校入学後十八年目にわずかに四名にすぎない。それらの人々は、十八年の長い生活の日々に、それぞれ語ればつきないきびしい思いを経験したにちがいありません。(略)戦争が、このような惨禍を生み出し、戦後にその爪あとを深くのこしたのだと作者は主張しようとしているのですが、にもかかわらず作者は大石先生の教え子たちのたどった一つ一つの経験をえがいているわけではないのです。¹²

と論じている。ここで言われている「満足な生活を営み得た人」とは、徳田吉次、西口ミサ子、山石早苗、加部小ツルの四名である。この論の通り、テキストではとくにこの女生徒三名は他の女生徒に比べ健全で、明るい人生を歩んでいる印象を受ける。しかし、果た

してミサ子、早苗、小ツルだけが「満足な生活を営み得た」女生徒といえるのだろうか。親に売られた生徒や肺病で一人淋しく亡くなった生徒もいるなか、夢を追いかけて、歓迎会に参加することができたマスノは「満足な生活を営み得」ていないのか。そして、彼女たちを一括りに「満足な生活を営み得た人」と評することは妥当なのだろうか。彼女たちのなかにも、自らの夢を叶え手に職をつけ自立した早苗と小ツルは「オールド・ミス」と呼ばれ結婚しておらず、専門的な職業に就いていないミサ子は結婚しているという大きな差異が認められる。ここでは「満足な生活を営み得た人」を二組に分け、女生徒の教育、職業、結婚に焦点を当てる。

まず、マスノが「満足な生活を営み得た人」でないことが妥当であるかを検討する。コトエは高等科にも進めず、嫁にもらわれることを将来の目標として女中奉公に出た。しかし、嫁にもらい手がつく前に肺病になって地元へ帰り、看取る人もなく一人物置で亡くなった。また、松江は五年生になってすぐ親に奉公に出され、富士子は高等科に進めず売られることとなった。

人は富士子をさげすみ、おもしろおかしく噂をした。

今ではもう人の記憶から消えさったかに見える松江といい、今また富士子といい、どうして彼女たちがわらわれねばならぬのか。(一〇六―一〇七頁)

と、大石は二人の人生を「まっとうな道とはどうしても思えぬ」(一〇七頁)と語っている。対して、マスノは「きりきり舞いをするような苦勞をした。ただ歌いたいために有頂天になり、親にそむいて

幾度か家出をした」(一〇六頁)とあるように、歌手になるという自らの夢を叶える為にもがいていた。家出の度に連れ戻され、今は家出中に知り合った男と結婚し、実家の料理屋を継いだ。苦勞し、自らの夢を叶えることはできなかったが、「大事なひとり娘」(八一頁)と家族から見放されることなく自分の夢を追いかけることのできる環境にいたマスノはコトエ、松江、富士子と同列に扱うべきではないだろう。

ゆえに本稿ではミサ子、マスノ、早苗、小ツルを「満足な生活を営み得た」女生徒と捉えたうえで、彼女たちとそれ以外の女生徒たちとの差異に目を向けてみたい。松江は小学五年生で母親が亡くなったことで、奉公に出され、小学校を卒業することができなかった。富士子は旧家の出身だったが、家に借金があり、親に売られ高等小学校に進学することができなかった。コトエは家が貧しく、成績優秀であったにもかかわらず進学を諦めた。このように彼女たちと「満足な生活を営み得た」女生徒の相違点は、尋常小学校以外の教育を受けたか受けていないかという点にある。すなわち『二十四の瞳』では、女生徒が進学していない点と、彼女たちの苛烈な人生には関係があると考えられる。当時の女子の就学率を調べ、女子児童の教育についての認識を確認していく。昭和初期の小学校の詳細は次の通りである。

初等教育の機関はすなわち小学校であり、この小学校に尋常小学校と高等小学校の二種類があった。(略)市町村は尋常小学校設置の義務があったが、高等小学校は任意設置であり義務教育でないため、授業料が必要であった。尋常小学校を卒業する

と中等学校に進学する一部の者(昭和十一年二一%)や、全く進学しない者(同一三%)、ただし職業のかたわら実業補習学校前期に通うことは予定された¹³以外の者(同六六%)が高等小学校に進学した。

高等小学校は義務ではなく授業料が必要である。コトエが成績優秀だったにもかかわらず、進学できなかった原因が貧しさであることは納得のいく理由である。また、男女合わせた数値ではあるが、昭和十一年は全体の六六パーセントが高等小学校に進学し、全く進学しない者は一三パーセントとある。このことから、コトエや富士子の進路は現実的には珍しく、家や社会情勢に振り回される女生徒の人生が強調されていると考える。さらに、男女別の義務教育就学率を見ると、大石が分校に着任した昭和三年の時点で女子は九四・四二パーセントであり、非常に高い。松江が小学校を中退した年の昭和七年でも、女子の就学率は九四・五八パーセントである。¹⁴尋常小学校以外の教育を受けることができなかった三名が「満足な生活を営み得」ておらず、特別苦勞し、病死や「遊び女」になるなど暗い人生を送っている。このことから、教育を受けることが女生徒たちの将来、生活上の満足と不如意を左右していると指摘することができ。『二十四の瞳』では、女子にとって教育が重要であるということが強調されているのではない。

次に、十分な教育を受け、先行研究で「満足な生活を営み得た人」とされるミサ子、早苗、小ツル、そして尋常小学校以外の教育を受けたマスノのテキストでの描かれ方を確認する。前述のとおり、尋常小学校卒業以上の学歴を有するこの四人に「満足な生活」を保証

する本テキストは、他方で必ずしも彼女たちに「満足な人生」を保証してはいない。まず、尋常小学校時代の四人の実家と生活について比較する。

ミサ子は生徒のなかで最も裕福であり、彼女の裕福さを表す描写は度々登場する。成績優秀にもかかわらず経済的理由で進学できない生徒もいるなか、彼女は出来が悪くても進学することができ恵まれた環境にいる。しかし、実家の裕福さとは裏腹に、進学先やその後の人生などは必ずしも恵まれているわけではない。ミサ子は、勉強が苦手であったため、親の希望していた女学校ではなく、「生徒は三十人ぐらいで、仕立屋に毛がはえたような学校じゃと。そんなら高等科のほうがよかったのにな」（九六頁）と言われる学園に入った。ミサ子について大石も「苦勞していない」と評価しており、「ミドリ学園から東京の花嫁学校にはいり、在学中に養子をむかえてすぐ子どもをうんだ。苦勞の多い時代に、これは別格である」（一〇五頁）と記されている。夫が戦死しても経済的に全く困窮せず、笑っていられるほどの余裕があった。しかしその豊かな生活に反して、ミサ子の性格は良いものには描かれていない。

「あの人こそ先生、かいつも行方不明ですわ。なんでも戦時中、成金さんにうけだされて出世したという噂もありましたけど、どうせ軍需会社でしょうから、今はどうなりましたか……。」

知らず知らず顔色に出たミサ子の優越感にも、人生の裏道を歩いているらしい松江や富士子のことにも、わざと目をそらすかのように大石先生はうつむいて（一二九頁）

とテキストにあるように、富士子について話している場面では、松江や富士子と比較した自分の人生への優越感を無意識に表情に表し、自分の心の貧しさをさらけ出している。

マスノはミサ子と同じく女生徒たちのなかでは裕福な家庭の子女であり、テキストでマスノとミサ子は二人一緒に説明されることが多い。マスノはおしゃべりで、気の強い小ツルと気の合う性格である。マスノは、目指していた音楽学校を親によって諦めさせられ、実家の料理屋を継いでいる。また、その「じみな作り」は「二十歳やそこらとは」みえないなど、苦勞をしていることが分かる。「満足な生活」を営めてはいても家に縛られた彼女の人生は必ずしも満足のものではない。

裕福なミサ子とマスノとは裏腹に、小ツルと早苗は、修学旅行に行く際にお金の心配をしたり、姉のお下がりを着たりなど金銭的余裕のない家庭で育っている。

小ツルも人の噂話をよくして、どちらかと言えばきつい性格である。しかし、大石は小ツルの性格について、人のことも言うが自分が言われても気にしない「さっぱりした」性格であるという。小ツルは小学五年生の時から産婆を志しており、その願い通り、高等科を出た後は大阪の産婆学校に進学した。小ツルのきつい性格はマイナスとされておらず、産婆学校を優等で卒業するなど努力をし、手に職を付け自立した女性として描かれている。

早苗は大人しい性格であったが、小学五年生の時から教師を志しており、高等科を出た後は優秀な成績で師範を出た。早苗は母親が苦勞した経験から、「赤十字の看護婦」（八七頁）となった姉と同じく早苗自身も教師という職に就きたいのだと語っていた。彼女は師

範を出て教師になるという大石と同じ進路をたどっている唯一の生徒である。大人しかった早苗は師範を優秀な成績で卒業するなど小ツルと同じく努力によって人生を切り拓き、職業を持った自立した女性として力強く描かれている。

四 女の理想の人生とは

マスノは家に縛られ、ミサ子も家は裕福であり苦労はしていないが思い通りの進学は果たせず、またその心の貧しさが描かれていることから、実家の経済的豊かさは必ずしも人生を明るい方に押し進める力があるわけではないことが分かる。小ツルや早苗は、実家は裕福ではなかったが自身の希望通りの進路を取り得ている。早苗に対する「母校にこの榮譽を得てその瞳はますますすがやき」(一〇七頁)という描写からは、充実した人生を送っていることが分かる。これらのことからテキストは、自らの努力によって明るい未来を引き寄せ、自立的に生きる二人に女生徒のなかではとくに充実した人生を送らせていると言っているわけではない。

ところで、二人の進路は同年代において、どのように位置づけられるのだろうか。マスノは歓迎会で、

男はみんなろくでもない目にあい、女は海千山千になつてしもた。小ツヤんや早苗さんじゃとて、やっぱり海千山千よ。ただその筆頭が、わたしとマツちゃんかな。でもやっぱり、人はわるくないですよ。苦労しただけ、もの分かりもええつもりです。ミイさんのような賢夫人や、小ツヤんや早苗さんのオールド・ミスのおえら方にはできません、わたしはするもん。なあ

マツちゃん、大いにやろう。(一三九頁)

と語っている。マスノのいう「オールド・ミス」という言葉からは、女性と結婚をめぐる同時代の認識を読み取ることができる。昭和十六年には政府によって早婚が推奨され、一九二〇年に既に二三歳であった女性の平均結婚年齢を十年間で三才引き下げ、一夫婦平均五人の子どもを持つことを目標にした¹⁵⁾という。また、加納実紀代は、

戦争は、数多くの若い男性を死なせた。当時適齢期の男女は、女性のほうが二五五万人も多かったといわれている。一人暮らしを余儀なくされた女性たちは、「オールドミス」「行かず後家」などと陰口をたたかれながら必死に働いた。¹⁶⁾

としている。歓迎会の時点で二四、五才の小ツルと早苗は既に「オールド・ミス」という陰口をたたかれ得る存在であった。¹⁷⁾『二十四の瞳』の多くの場面は大石久子の視点で描かれている。ゆえにより大石の境遇に近い、早苗や小ツルを生き生きと力強く描いていることは予想できる。しかし、それが時代の価値観と少なからず乖離していることに注意を払う必要があるのではないだろうか。濱貴子は戦前期の大衆婦人雑誌『主婦之友』での職業婦人のイメージの変容について、一九二八年から一九三七年の職業婦人は職業の延長線上に家庭婦人としての「成功」があり、結婚して幸せな主婦になる事が「憧れ」「幸福」であると意味づけられていたとしている¹⁸⁾。このことから考えると、「オールド・ミス」と呼ばれ、結婚をしていない早苗や小ツルは幸福な人生を歩んでいないといえる。他にも、

大浜英子は

女の場合は、いつも、職業か、妻かというように、妻にならない女が職業をもつもの、あるいは妻になるまで職業をもつものだというように考えられている。言いかえると、むしろ、妻は職業だと考えられてさえる。¹⁹⁾

と述べている。これらの言説はミサ子、早苗、小ツル、マスノの四名が、結婚した二名と結婚せず手に職を付けた二名とで分かれていることと一致している。こうしたあり方をふまえたうえで大浜英子は、

高い教育をうけた女性に課せられていることは、主婦と職業とを、それぞれの立場で、どう両立させるかということである。
(略) 新しい今日の女性の道は、主婦の幸福と、職業の幸福をどうして身につけるからにはじまる。²⁰⁾

と新たな見解を述べた。高い教育を受け専門的な職業についた早苗と小ツルは「職業の幸福」は満たしているが、「主婦の幸福」は満たしていない。戦後という若い男性が減っている状況ではあるが、テキストが小ツルと早苗を未婚としているのは、大石の女性像を印象付けるためであると考えられることもできるだろう。須浪敏子は「大石について、

正規の尋常小学校教師となり、当時の花形職業であった高等商船学校卒の外国航路の船員と好きあって結婚し、田舎では習慣

がなかった新婚旅行に行き、妊娠して産休までとって職を引いたバリバリのハイカラさん、新しい女である。そして、サクセスウーマンである。²¹⁾

と述べている。彼女は物語内で終始新しい女として描かれている。大石は当時珍しい師範出身であり、洋服を着て自転車に乗る新しい女性であった。そして、夫が戦死したのち、四十才になってからは子どもを育てながら、教職に復帰をするという両立を果たしている。大石久子の生き様は、時代の波に巻き込まれた女生徒たちの人生の不完全さ、過酷さを際立たせるのである。

五 おわりに

本稿では、『二十四の瞳』の反戦文学の側面だけを重視するのではなく、女性登場人物と教育、職業、結婚に焦点を当て、考察を行った。具体的には従来「母性的」と一括りにされてきた大石久子の教師像の再検討や、戦争に直接的に関わっておらず、深く触れられてこなかった女生徒の人生について掘り下げた。

当時稀な師範科出身の大石の生徒に対する愛情は必ずしも従来指摘されていたような「母性」的なものではなく、教師の立場として生徒に寄り添ったものであることが分かった。また、女生徒の進路と将来の関係性について考察し、教育を受け、専門的な職に就き自立を果たす女性たちが作中で力強く描かれていることを明らかにした。テキストは「満足な生活を営み得た人」と評することのできる四人の女生徒を、婚姻の有無により二様に描き分けている。さらに彼女たちを含む女生徒たちとその対比により、家庭を持つ職業婦人

としての大石の女性像が強調されるのではないか、という結論を導いた。

反戦文学の名作とされる『二十四の瞳』であるが、反戦という意識から離れ、大石や女生徒たちに注目することによって、「可哀想な時代の被害者」という感想でまとめることのできない女性の生き方を読み取ることができる。ここでは、暗い現状から脱却するためこの先の女性たちに何が必要かということが、ヒロインである大石久子とその教え子たちによって示されているのではないだろうか。

注(1)

- 代表的なものとして、菊池昌子「壺井栄『二十四の瞳』の大石先生」〔國文學 解釈と教材の研究〕一九八四年三月、三木弘子「『二十四の瞳』——戦争と不況が我々にもたらすもの」〔文芸（園田学園女子短期大学）一九八六年三月〕、李先端「反戦文学の傑作——壺井栄の『二十四の瞳』をめぐって」〔アジア言語文化研究〕二〇一九年六月）などが挙げられる。
- (2) 滝川弘人「教師と教え子との関わりの中の写真の機能——シンボリックアーティファクトとしての一枚の写真」〔東京大学大学院教育学研究科紀要〕二〇一五年五月
- (3) 渡部芳紀「『二十四の瞳』」〔國文學 解釈と鑑賞〕一九九七年一〇月
- (4) 壺井栄「あとがき」〔『二十四の瞳』 光文社、一九五二年〕
- (5) 若桑みどり「戦争がつくる女性像——第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ」〔筑摩書房、一九九五年〕
- (6) 山田昭夫「壺井栄『二十四の瞳』」〔國文學 解釈と鑑賞〕一九七二年三月
- (7) 小林裕子「第六章 反戦文学と国民文学の間で 七 女の視点による反戦文学」〔『女性作家評伝シリーズ 二 壺井栄』新典社、二〇一二年〕
- (8) 板垣恭子『女学校と女学生』（中央公論社、二〇〇七年）

- (9) 下田次郎『女子新修身書教授備考』（東京開成館、一九二七年）注(9)に同じ。

- (11) 新福裕子『女子師範学校の全容』（家政教育社、二〇〇〇年）

- (12) 田丸太郎「文学に描かれた青年像（第十回）壺井栄の『二十四の瞳』近代思想研究会」（『人生手帖』一九五七年一月）

- (13) 百瀬孝『事典 昭和戦前期の日本 制度と実態』（吉川弘文館、一九九〇年）

- (14) 下中邦彦『日本近代教育史事典』（平凡社、一九七一年）

- (15) 永原和子「家」の結婚から性別役割家族の結婚へ」〔時代を生きた女たち 新・日本女性通史』朝日新聞出版、二〇一〇年〕

- (16) 加納実紀代「シアワセ結婚」からシングル社会へ」〔時代を生きた女たち 新・日本女性通史』朝日新聞出版、二〇一〇年〕

- (17) 村田鈴子「文学作品にみられる教師像の研究——壺井栄『二十四の瞳』の場合——」〔研究紀要』第二号、一九七九年三月）、田丸太郎「文学に描かれた青年像（第十回）壺井栄の『二十四の瞳』近代思想研究会」（『人生手帖』一九五七年一月）、小林裕子「第六章 反戦文学と国民文学の間で 七 女の視点による反戦文学」（『女性作家評伝シリーズ 二 壺井栄』新典社、二〇一二年）などで論じられている。

- (18) 濱貴子「戦前期『婦人之友』における職業婦人イメージの形成と変容——『職業婦人』と『主婦』のイメージの接続——」〔社会学評論275〕二〇一八年二月）

- (19) 大浜英子「職業婦人と主婦」〔『学生と社会』一九五〇年〕

- (20) 注(19)に同じ。

- (21) 須浪敏子「『二十四の瞳』論」〔四国学院大学論集〕二〇二一年一月

付記 『二十四の瞳』の引用は、『壺井栄全集五卷』（文泉堂出版、一九九七年四月）に拠る。ルビは適宜省略した。